原田牧場 Note Page 3

原 田　希

北海道農業士になって４年がたちます。「新規就農者への助言」「経営改善や地域農業の振興に関する協力」ができる地域のリーダーという位置づけで昭和50年頃から認定が始まり、全道で1700名ほどが活動中です。その中で女性は３％ほどですが、わが町には４名おり、農業士の上の組織になる、北海道指導農業士も女性が２名おり、チームで女性農業者向けの勉強会の開催をしています。　私が嫁いで酪農を手伝い始めた頃、牧場の母に言われてびっくりしたのは「教えられないからどっかで習ってきてください」でした。
母たちの世代は、親や夫が言う通りの家流を守ることが普通とされていて、どうしてこうなのか？と私に聞かれると理由を説明できなかったのかもしれません。４，５頭しか飼養していなかった時代から大規模経営へ。今は200頭に増えているので、新しいやり方を習ってきて、という意味でもあったかもしれません。じゃあ勉強しに行くしかない、といろいろな勉強会に顔を出しているうちに、様々な農家のお嫁さんたちと出会います。
勉強会なんて行かなくていい、うちはうちのやり方なんだから。と言われてます、というお嫁さん。勉強して帰って実践しようとしても相手にされません、というお嫁さん。機械化が進んだ昨今は、仕事はしなくてもいい、と言われているお嫁さんもいました。勉強はしたいけど、子供が小さいから預けてまで参加するのは気がひける。という方も。
うちは勉強してこいと言われたけど、勉強不要とされる状況のひともいるんだなあ。それでも学びたいと思う原動力はなんだろう？と考え始めます。昔は、お嫁にいく＝家に嫁ぐでしたが、今は、人に嫁ぐ時代です。夫が働く姿を間近で見て、力になれたら！と思っているお嫁さんがこんなにたくさんいる！強制されて家を手伝うのではない、その伸びやかな意欲をもっともっと後押ししたいな、と思うようになったのでした。

勉強会は２部制で、講義と自由参加のサロン。サロンはお昼を食べながら講義の質問や交流ができる場です。講義の後なので、知らない人とでもすぐ話題にできるテーマがあるし、同じ酪農家でも営農手法は千差万別。おたくはどうしてるの？なんかいい方法ない？これやって失敗しちゃった！と実体験からくる生の声があふれます。お嫁に来たばっかりで、質問できるほどの知識がまだないという方でも聞いているだけで面白い話ばかり。
さらに、経営（お金）の切実な悩み、夫婦関係のグチまで女性の本音祭りです。ちなみに男性たちが集まる会合でこういう話は出るのか？と夫に聞いてみたところ、自慢話、成功事例は話すことはあっても、失敗談は誰も語らないとのこと。女性を外へ出して、大いに語らせることにはすばらしい意義がある。勉強会から家に帰って、夫婦での話題にもうひと花咲けばいいな。とサロンの風景を遠目にみながら今日も思います。

さて、私自身は、講義や優良農家の視察に足を運びつつ、得てきたことを実践する前に、牛一頭一頭のデータを頭に記憶していきました。分娩の癖（早産、難産、双児を産みやすい）、乳房炎などの病歴、発情徴候の特長、牛の性格（餌を食べ負けないか、人に対して神経質か）、脚や爪の丈夫さ、搾乳性（搾り残しをするか）など。時には搾乳しながら牛に話しかけたり、牛が話せない分、この牛のいいところは？と想像し、全頭の顔の区別もつくようになった頃、牧場の家族は牛一頭一頭について、全部私に聞いてくるようになりました。
技術面ではまだ足りないことだらけでしたが、家族の牛談義に入れるようになったのです。勉強会で聞いた新しい知識を実践できたのは、ここから10年かけて少しずつでした。経営が安定している農家ほどやり方を変えるのを嫌います。今うまくいっていってるんだから変えなくていい。昔の苦労に比べればなんともない。効率は悪いけどこれでやろうと思えばできるんだ精神を否定するつもりはありませんが、30分でも早く仕事からあがってゆっくりしませんか？どんぶり勘定せず、ここは節約しましょうよ、と話しをしながら一歩ずつでした。

新しくお嫁にきた方も、家業の実体（農家の労働環境はいまだ過酷）を見て焦る気持ちがあるでしょう。私も経験した一歩ずつをご希望あらばお話できますが、サロンでは、夫婦の仲の良さは経営に表れる。大丈夫やで！と一言いうだけでいいのかな、と思っています。
なぜかというと、こんな田舎の、基本休みもない３Kといわれる職種の酪農家に、彼が好きというだけで嫁いできた女性の意志の強さを知っているから。きっと自らの居場所を自分の手法で開拓していくでしょう。

私が農業士を引き受けたのは、自分が学びたいテーマで勉強会を開催できるからでした。肩書きには全く興味がないのが本音です。ただ、肩書きと役割をいただいたから、参加者の小さな声にも耳を傾けるスイッチが入り、地域全体の女性がいきいきと活躍できる足がかりとしてのコミュニティ＝勉強会を立案していきたいと考えるようになりました。案内文で呼びかけ、性にあってないながらPR活動もやっております。また、個人的な相談にのる時には、農業士は関係なく、ただのご近所の同志として、元気ないやん、どうしたん？とそっと声をかけられる人でありたいです。

最後に「教えられないからどっかで習ってきてください」と言った牧場の母さんについて。当時は、右も左もわからない私に教えもしないで、なんて無責任な！と少なからず思ったのですが、母さんがこれまで生活や仕事に関して「やりなさい」と言ったことは一度もありませんでした。私から新しく試したいことを話せば「やろう！やってみよう！」と言ってくれるのです。やってみよう！と言いながら、母さんは絶対やらないのですが（笑）。「やれ」と強制されたらやりたくない私の性格を読み切っていたのか？母さんの計算かはいまだわかりませんが、私をぐんぐん伸ばしてくれた魔法の言葉です。

筆者　　原田　希　ハラダ ノゾミ

1973年 大阪府吹田市生まれ
2006年 酪農家との結婚を機に北海道標茶町へ移住。自身も酪農家に。
2017年 北海道農業士に認定
北海道指導農業士の夫とともに、新規就農者の支援や、
女性の農業者向けの勉強会、道外からのお嫁さんの会のお世話係を担当